阿 波 の ま ち な み 研 究 会 報

2023 年 7 月号

vol.344

■第 51 回太鼓楼見聞録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・2～4

■古民家見学報告「大久保家住宅」・・・・・・・・・・・・5～7

■事務局通信　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

阿　波　の　ま　ち　な　み　研　究　会

〒770-0931　徳島市富田浜 2-10　(公社)徳島県建築士会

phone：088-653-7570　　fax：088-624-1710

太鼓楼見聞録 (51)

四国中央市の興味深い重層門 4
梁間三間の馬立本陣正門、三角寺鐘楼仁王門
五明院西門、光明寺仁王門

谷中　俊裕（阿南高専）

前回紹介した新長谷寺の重層仁王門は、門部分（通路部）の梁間を 3 等分した柱配置を有する重層長屋門である。今回は、同じく四国中央市内の、門全体が梁間三間の本陣正門 1 棟と寺院の山門 3 棟を紹介したい。残念ながら、今回の物件は、本連載でこれまで扱ってきた重層建築ではなく、すべて単層門なのだが、先に紹介した 2 件の重層門と併せて、梁間が二間を越える門の系統論へのヒントを与えてくれる。（節、図版、文献の番号は、前回の続きとなっている。）

7. 馬立本陣正門（新宮町馬立土居 4488）—本柱前方と本柱控柱間に控柱を加えた、装飾の際立つ薬医門ベースの単層梁間三間門（市指定史跡）

馬立本陣は、銅山川に向かって北流する馬立川左岸、現在の道の駅霧の森の一角に立地していた。土佐藩主が参勤交代の際に使用し、馬立川右岸の土佐北街道から同川にかかる太鼓橋(現存せず)を渡って本陣に入っていた。(文献 19、文献 20)

本陣の主要な建造物は、明治 30 年に火災で焼失したが、正門のみは明治初年に金川村(現市内金田町)の円徳寺(現在は上柏町に移転)に移築されていて難を逃れた。昭和 58 年に現地に戻され復元されている。正門のほかに、高さ 3m、幅 50m の野面積石垣、正門に続く石段(元はもっと緩やかなたたきの斜面であった)が残る。(文献 19)

写真 20：馬立本陣正門と正面石垣

正門は、三間一戸、梁間三間(実寸 1.6 間)の入母屋桟瓦葺、両脇一間のうち正面から見て左側は、通用口であった。前方から一間の通りに鏡柱 1 対を配しているので、この通りを本柱通りとみなしたくなる。しかし、鏡柱筋には前後とも控柱を欠いているので、桁行三間(実寸 2.4 間)の略式八脚門ベースというよりは、鏡柱を追加した四脚門または薬医門ベースと考える方が自然である。四脚門ベースと考えるなら、後方の控柱のさらに後ろに側柱/控柱を追加したもの、薬医門ベースと考えるなら、本柱の前方と本柱と控柱の間に 2 対の側柱/控柱を追加したものと解釈できる。この門の柱配置を派生するためには、図面上では四脚門ベースと考える方が最も少ない加筆で済むが、機能的には四脚門を後方に拡大する理由は、側柱を追加して堅牢さを増すことしかない。むしろ、薬医門ばりの、大棟の真下よりやや前方という本柱通りの位置を維持するためという審美的な意図を無視できない。それゆえ、この柱配置は、四脚門ベースと

写真 21：馬立本陣正面平側・大棟にリアル波濤の水板

写真 22：馬立本陣正面平側・左妻側・軒裏見上げ

写真 23：同左妻側

考えるより図面上では一筆加筆が多くなるが、敢えて薬医門ベースと考えたい。ただし、本柱通りの側柱は、本柱と呼べるほど太くなく、際立った地位を失っている。4 対の側柱はほぼ同寸(225 角)である。

大棟の水板には波濤が踊り、軒裏には絵様持送と腕木に支えられた出桁が巡り、冠木上には三連の透かし蟇股が並ぶ。このような高度な装飾性は藩侯の宿所として利用されていた時代の名残に相違ないが、門そのものの具体的な建造年代は伝わっていない。

８. 三角寺仁王門（金田町三角寺 75、高野山真言宗）－三間一戸八脚門の前方に控柱を追加した梁間三間入母屋単層鐘楼仁王門

三角寺は法皇山脈北側の中腹、新長谷寺の東方約 8km の山中に伽藍を構える。天平年間に聖武天皇の勅願で行基の開基、後に空海が当地で本尊を刻み、三角の護摩壇を築いたことが寺号の由来とされる。現在四国霊場六十五番札所である。(文献 3 911)

仁王門は、門前の小集落から青石の石段を上り詰めたところで参拝者を出迎える。三間一戸、桁行三間（実寸 3.9 間）、梁間三間（実寸 2.2 間）、八脚門型の仁王門の前方梁間一間の通りに 1 対の側柱/控柱を加えている。三間の梁間の中央通りに大棟が走るように銅板葺入母屋屋根を頂く。軒裏は二軒繁垂木、前方に追加された側柱/控柱を含め柱は全て 280 径の丸柱で、本柱が際立つ通りはない。八脚門部分の前部、後部と最前部に虹梁型頭貫が渡るが、最も大型なのは最前列のものである。単層門でありながら、通路部の天井から梵鐘が吊られている。

写真 24：三角寺仁王門正面平側・右妻側・軒裏見上げ

写真 25：同背面平側・右妻側

仁王門の創建年は不明だが、幕末近くに本堂や大師堂など多くの堂宇が再建されているので、それらにともなう建造の可能性がある。昭和 59 年に旧態を正確に再現して新材で更新された。(文献 3 911)

９. 五明院如意輪寺西門（金生町下分 594、高野山真言宗）－三間一戸八脚門の前方に控柱を追加した梁間三間入母屋単層二天門

通例院号で呼ばれる五明院如意輪寺は、金生川左岸の平地に立地する。創建の古い寺院だが、兵火や水害で古文書を失い、古い歴史の詳細は不明である。院号は、慶長年間に五か寺が合併したことによる。(文献 3 896)

写真 26：五明院西門正面平側・左妻側・軒裏見上げ

写真 27：同背面平側・右妻側

西門と呼ばれる二天門は、八脚門の本体の前方一間に一対の側柱/控柱を追加した桁行三間(実寸 3.3 間)、梁間三間(実寸 2.1 間)の基本的柱配置、大棟が梁間中央に走る入母屋屋根(葺材は本瓦)、二軒繁垂木、最前面の巨大な虹梁型頭貫など、三角寺の仁王門に酷似する。一般的に、二天門には、四天王のう

ちの二天が鎮座するが、五明院の二天門では、正面から見て左に広目天、右に持国天を配している。

西門の創建年は不明であるが、天保 12 年(1841)の改築との記録がある。(文献 3 896) 基本的にはこのときの軸組、小屋組を維持している。(近年、材を洗い、二天像周りには新材を入れている。)

１０. 光明寺仁王門（中之庄町光明 1279、高野山真言宗）－三間一戸八脚門の前方に控柱を追加し、流造本殿風切妻屋根を頂く梁間三間仁王門

光明寺は、新長谷寺の東方約 3 ㎞、法皇山脈中腹に源を発する小河川大谷川右岸の扇状地に立地する。

写真 28：光明寺仁王門
正面平側・右妻側

現在は無住で、地域住民の手で護持され、近隣の持福寺の末寺となっている。昭和 59 年、同寺の仁王門改築の際、旧仁王像を譲渡され、その鎮座所として仁王門が新築された。(持福寺での聞き取り)

写真 29：同背面平側・右妻側

三間一戸、桁行三間(実寸 3.3 間)の八脚門の前方一間通りに軒柱風控柱を 4 本配し、八脚門部分の本柱通りに大棟が渡る桟瓦葺切妻屋根を前方の軒柱風控柱の先まで葺き降ろす。その様は、三間社流造の神社本殿を髣髴する。柱はすべて 110 角で、軒柱風控柱まで含めれば、梁間三間(実寸 1.5 間)と言える。仁王座の背面の左右一間には中央に間柱が入る。

１１. おわりに

今回のシリーズで見た門の三間(1 棟は四間)の梁間には、2 通りの意図が働いているように見える。まず、一柳氏川之江陣屋の門、新長谷寺仁王門、馬立本陣正門で際立つのは、薬医門の本柱通りに相当する位置へのオマージュである。前方から三分の一(或は四分の一)の通りが鏡柱や冠木で強調されている。一方、三角寺仁王門、五明院西門、光明寺仁王門では、ベースの八脚門の前方一間の通りに控柱を追加し、その結果三間の梁間が現れている。その背景にあるのは、仁王像や二天像をより奥まった位置に置いて奥ゆかしさを増したり、参拝者のために軒下に日陰や雨宿りの空間を提供するという機能的な意図である。しかし、いずれのパターンの門でも門部分の側柱の太さで見る限りは、本柱と言えるような際立った側柱のある通りはない。

後者のパターンの梁間三間門は、四国中央市域では単層門だけであったが、他地域には少数ではあるが楼門や二重門の例も存在する。徳島県では、上板町の大山寺鐘楼門、美馬市真楽寺鐘楼門などの例がある。

写真 30: 上板町大山寺鐘楼門

また、四国中央市域で梁間三間門が 5 棟も存在していること自体門建築の地域色と認定してよいものと思われる。

写真 31：美馬市真楽寺鐘楼門(現状)
最後列では、(写真では見えないが)最前列同様中央一間筋の控柱を省略している。近年改築され、桁行が拡大されたが、柱の位置関係は維持されている。

参考文献（番号はこのシリーズの初回から継承、今回言及のないものは省略）

3. 川之江市誌編さん会編 (1984) *『川之江市誌』*、川之江市.

19. 四国中央市教育委員会(設置年不明) *『馬立本陣』*、現地の案内板.

20. 「馬立本陣」、*『城郭放浪記』*、https://www.hb.pei.jp/sokuseki/ehime/umatate-honjin/ 2023/07/21 最終閲覧.

古民家見学報告

大久保家住宅

まちなみ部会　林　茂樹

つるぎ町半田は半田素麺で有名な町であるが、かつては半田漆器の製造で栄えた。

広大な屋敷を構える大久保家は敷地屋本家と呼ばれ、かつては半田漆器の町内唯一の問屋を営んでいた。

平成３年（1991）半田町の阿波学会総合学術調査に民家班で参加した時、大久保家にも調査に入ったが広大すぎて詳細調査は出来ず、配置図を紀要に掲載しただけであった。

今回も時間の関係で主屋・新宅・ハナレの間取りの調査を行った。配置は、敷地西面に入母屋本瓦葺懸魚付き屋根に外壁は漆喰塗白壁に腰に海鼠壁の長屋門を配し中央の門の左右にバンヤとナヤを配している。欅造りの門扉をくぐると中庭に出る。正面に玄関が見えるが、増築された新宅部分にある。

新宅は本瓦葺切り妻屋根の上屋に本瓦や平形スレート葺きの下屋を廻りに巡らせている。

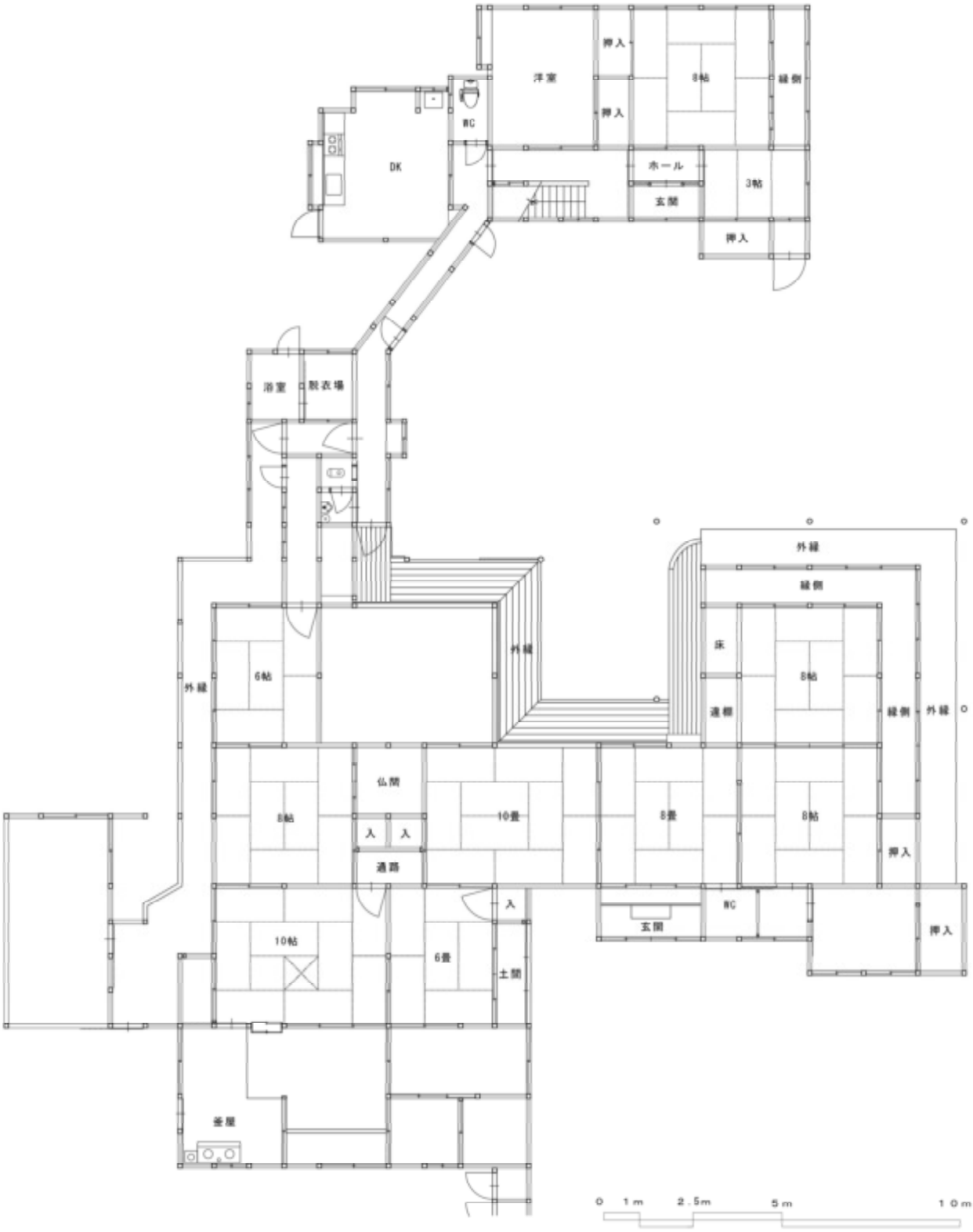
間取りは玄関に接する間、次の間、床を配し廻り縁を巡らせた表座敷と八畳の座敷が続き、縁側の外側に建具のない外縁を巡らせている。

新宅の北側に十畳の間を介して中心に仏間を配した変形の六間取りの主屋が繋がる。

屋根は切妻本瓦葺き、西側は土間のカマヤや使用人の部屋と思われる二畳の間などが設けられている。南東には外縁を巡らし、東の便所・風呂棟から渡り廊下でハナレに繋がっている。ハナレは平瓦葺寄棟屋根で外壁はペンキ塗りの南京下見板張り。南面に縁側付きの八畳和室と押入の付いた三畳間。北側に六畳洋室を配する。西側中央に玄関を持ち、主屋から独立して生活できるように便所や、RC造若しくはブロック造のダイニングキッチンを設けている。二階は未調査。

長屋門

正面新宅の玄関


洋室
押入
8帖
縁側
WC
DK
ホール
3帖
玄関
浴室
脱衣場
外縁
6帖
床
8帖
連棚
仏間
10畳
8畳
入
通路
10帖
6畳
土間
玄関
釜屋
0 1m 2.5m 5m 10m

1階平面図 1/100

【事務局通信】

令和５年５月例会の報告

◇令和5年月5月 19 日(金)17:30～
建築士会会議室
まち研だより発送作業:坂口、林、丸山、島田

◇令和５年５月 19 日（金)18：30～　例会
建築士会会議室
坂口、林、丸山

令和５年６月例会の報告

◇令和５年６月 16 日(金)18：30～　例会
建築士会会議室
坂口、真鍋、丸山、

まち研の活動に関するご案内１

◇東祖谷　木村家住宅隠居屋修理工事見学会

国重要文化財『木村家住宅隠居屋』（三好市東祖谷）の修理工事が行われています。現在は茅を下ろして、素屋根が掛かっている状態です。軸組の状態がよくわかる今の時期に、見学会を開催したいと思います。開催日時等の詳細は、まち研メンバーまでお問合せください。（参加募集の締め切りは過ぎておりますが、個別に対応できる場合があります。）

↑木村家住宅隠居屋（文化庁データベースより）

まち研の活動に関するご案内２

◇香里園 八木市造邸見学会　参加者募集

八木邸は、『聴竹居』で知られる藤井厚二設計の木造二階建て住居で、大阪府寝屋川市に、1930 年(昭和５年)に竣工しました。

見学は事前相談が必要で、10 月以降に見学可能となっています。見学ツアーを実施したいと考えておりますので、参加ご希望の方は、まち研メンバーまでお知らせください。(相談には参加人数、氏名などが必要となるため。)

↑八木邸内部（八木邸 HP より）

令和５年８月例会のご案内

◇令和５年８月 18 日（金）18：30～
建築士会会議室
※まち研だより発送作業はありません。

編集部より

☆引き続き原稿を募集しています。送付は以下のアドレスまで。
Mail to: m-style@mb.pikara.ne.jp

《まち研だより》2023 年７月号 VOL.344 号
発行日　令和５年７月 21 日(金)
発　行　阿波のまちなみ研究会
〒770-0931 徳島市富田浜２丁目 10
(公社)徳島県建築士会
TEL.088-653-7570　FAX.088-624-1710
代表者　坂口敏司(坂口建築設計室)
事務局　真鍋憲資(studioKEN)088-635-4272
studioken@mc.pikara.ne.jp
編集者　島田めぐみ(M-STYLE 設計室)
谷中俊裕(阿南工業高等専門学校)